

---

# Scientific Approaches to Language No.8 March 2009

---

## はしがき

神田外語大学言語科学研究センター（CLS）の紀要第8号をお届けします。CLSは、本学大学院（言語科学研究科）に附置されていることから、大学院の専任教員による研究プロジェクトの円滑な遂行を支援すると共にそれらと関係のある活動（各種研究会や講演会の開催など）を中心に行っています。今年度は、前年度から継続のプロジェクト3つに加え、新たに、2つの日本学術振興会科学研究費の補助金によるプロジェクトが充足し、多忙ですが充実した1年となりました。巻末（175～205頁）には、本年度の活動が、開催した研究会などの詳細にも言及して報告されていますので、ご参照下さい。

新規のプロジェクトの1つは、堀場裕紀江教授が研究代表者の4年間の基盤研究(B)『語彙とテキスト理解：読解に関わる語彙知識の多面性と語彙の意味について』で、堀場教授を中心に遂行された平成14-16年度の基盤研究(B)『テキスト理解と学習』の成果を取り込み、言語（日本語）学習者の語彙知識について理論的・記述的・実証的に研究する意欲的なものです。もう一つは、CLSの神谷昇研究員を研究代表者とした3年間の基盤研究(C)『早期英語教育教材に見る語彙と文法の特徴：真に「英語が使える日本人」育成に向けて』（以下、神谷科研）で、英語教育（特に、2011年から必修化される小学校英語教育）で培われるであろう英語力を、言語学・英語学の視点から明らかにしようとするものです。

前年度から継続のプロジェクトのうち、長谷川信子による基盤研究(B)『文の語用的機能と統語論：日本語の主文現象からの提言』（長谷川科研）は2年目にあたることから、対外的な活動を中心に、MITの宮川繁教授によるレクチャーシリーズ、7月に2日間にわたり都内の本学関連施設（神田外語学院）で行われた国内外の研究者を迎えてのワークショップなどを開催しました。また、同じく2年目の小林美代子教授による基盤研究(B)『早期英語教育指導者の養成と研修に関する総合的研究』（小林科研）では、神田外語グループ全体からの支援も受け、ブリティッシュカウンシルと共催で、昨年を引き続き、2月に大規模なワークショップを開催しました。

本紀要には、そうした活動の成果および、それらから派生した論文が8編が収められています。＜言語学編＞の6編は、長谷川科研のテーマ（かつ、井上和子顧問によるゼミの内容）とも関わり、文の意味・機能とCPの構造に言及したものが中心です。遠藤論文では副詞節の機能範疇の構造と主節の関係を、井上論文では現象文におけるCP構造内のForce句を、Ueda論文では日本語のモダリティを取り込むCP構造を扱っています。藤巻論文は長谷川科研のワークショップでの発表を発展させ、慣用句の一部が取り立て詞となる構造を分析し、神谷論文は英語のthere構文を場所倒置構文との類似性を捉える形で考察しています。＜言語教育編＞の2編は早期英語教育関係のもので、神谷他の論文は、4年目を迎えたJSTからの委託研究（巻末の205頁参照）の成果を織り込みつつ、神谷科研の観点から『英語ノート（試作版）』の語彙の調査と分析を提示し、宮本論文は、小林科研のワークショップでの発表を発展させ、共に、小学校での英語教育に実践的に応用可能な興味深い内容となっています。

そうした活動の全てにわたり、その遂行は、CLSの宮本弦特任講師、CLS専任研究員の神谷昇さん、町田なほみさん、森谷浩士さんはじめ非常勤研究員、大学院生や学部生、そして、事務補佐員の椎名千香子さんの献身的な働きのお陰で可能となりました。心より感謝申し上げます。

2008年9月  
言語科学研究センター・センター長 長谷川 信子

## 言語学編

遠藤 喜雄

(Anti)-symmetry in Syntax

日本語学の研究の中から、副詞節に生じる階層的な機能範疇のタイプと副詞節が修飾する主節の要素との間にパラレルな関係がある現象を取り上げる。このパラレリズムが、普遍文法の性質、とりわけKayne (1994)の考えを応用することによって導きだされることを見る。また、Appendixでは、同じ性質を主要部移動制約(head movement constraint; HMC)から導き出す可能性を論じる。

## 藤巻 一真 慣用句における取り立て

本稿では慣用句の一部に取り立て詞が付加された際に、何を取り立てるのかという問題を取り上げる。取り立て詞が目的語のような補足語についた場合に何を取り立てるのか分析している益岡1991を基に、その予測について考察し、それが慣用句の場合に概ね当てはまるが、一部そうでない例があることを示す。そしてその例外がどのような場合に許されるのかを考察し、2つの条件を挙げてから構造的分析を行う。これにより、慣用句は取り立て現象に関して、一般の場合と異なり意味的・統語的制限があるものの、条件を整えばその制限を充たしながらも、一般の場合と同様の振る舞いをすることを示す。

## 井上 和子 現象文とその周辺

話し手の感覚や感情を直接に表出する感覚文と話し手の直接の感覚や知覚を表現する現象文の述語語尾の「る」が現在時制辞の「る」と異なる特徴を持つことに着目し、この「る」を語尾とする述語を述語の原形(root form)と仮定し、これらの文の統語上、意味上の特徴の解明を試みた。そして、原形述語を持つ感覚文と現象文を独立文として成立させる条件について考察し、補文標識句(CP)の機能範疇であり、文型を決定するForce Phraseの存在が唯一の条件であるとの結論に至った。

## 神谷 昇 動詞句外there構文の統語構造

本稿は英語のthere構文の1つで、動詞にPPと意味上の主語がこの順序で後続する動詞句外there構文(outside verbal there-construction)を取り上げその統語構造を検討する。具体的には、この構文は場所句倒置構文と類似の特徴を持つことを考慮に入れ、この構文の派生には動詞のTへの移動とPPの[Spec, vP]への移動が関与することを提案する。そして、場所句倒置構文と動詞句外there構文をPPの移動先の観点から比較・検討し、前者は「vP外場所句倒置構文」、後者は「vP内場所句倒置構文」であることを示す。

## YUKIKO UEDA (上田 由紀子) The Right Periphery in the Japanese CP

Rizzi (1997) proposed a split CP system on the basis of the syntactic facts of Italian discourse elements on left periphery such as topic and focus. This paper explores the Japanese CP system by means of the right peripheral elements such as modal forms and sentence final particles. We claim that there is at least four independent heads in the Japanese CP-system, C1 for Fin in Rizzi's sense, C2 for E-modals, C3 for U-modals, and C4 for Sentence Final Particles.

言語教育編

## 神谷 昇・長谷川 信子・町田 なほみ・長谷部 郁子 『英語ノート (試作版)』の語彙の特徴—品詞と意味の観点から—

本稿は、2011年から公立小学校で必修化される英語活動の一定基準を示すために作成された『英語ノート (試作版)』に現れる語彙を言語学的観点から、その特徴を考察し、それを基盤に小学校での英語活動で可能となる英語のカタチを明らかにするものである。まず、早期英語教育の分野におけるこれまでの語彙研究を概観し、早期英語教育用語彙リストを比較した上で、収録語彙の特徴をとらえる。次に『英語ノート (試作版)』の語彙のうち、児童の語彙に着目し、それらの品詞割合を分析し、先行研究との比較に加え、成人向けの語彙との比較も併せて行い、相違点を検証する。さらに、『英語ノート (試作版)』出現語彙のうち、先行研究で示された早期英語教育用語彙リストと大きく異なる割合を示した動詞に焦点を当て、その意味タイプのカテゴリ、有生物主語と無生物主語の割合について言語学的見地から考察し、その特徴をとらえ、『英語ノート (試作版)』に提示されている「英語の特徴・カタチ」を、英語の体系の観点から明らかにする。

宮本 弦

— 小学校指導者の英語運用練習—チャンツ集を利用した研修試案—

本稿は、チャンツ集、絵本、教室英語表現集などといった早期英語の典型教材を用いて実施する小学校英語活動指導者のための研修の試案を提示する。この試案を計画するに当たっては、1) 教室での授業に直結するものであること、2) 手持ちの英語知識の自動化を促すものであること、及び3) 「発音」についての不安の解消に貢献するものであることの3点を念頭に置いている。具体的な研修内容は、まず、リズム活動を用いたトップダウンの発音練習の音韻論的背景を説明し、続いて教材の選択と練習の方法及び手順の解説をする。そして最後に継続的な発展研修の示唆へと段階を追って展開する。